藤村全集

第八卷

筑摩書房版

藤村全集第八卷

昭和四十二年六月十日發行

著者　島崎藤村

發行者　竹之內靜雄

發行所　株式會社　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話　東京(四)—七六五一(代表)
振替口座　東京四一一二三番

第八卷　目次

海へ

第一章

海へ……四

神戸——上海——香港——支那海——佛領セイゴン港（安南）——新嘉堡（馬來半島）——印度洋——コロンボ港（錫蘭）——アラビヤ海——佛領ヂュプティ港（亞弗利加）——紅海——スエズ——運河——ポオト・セエド

第二章

地中海の旅……八

ポオト・セエド——イオニエンヌの海——シシリイ島——チレニエンヌの海——佛國マルセエユ港

第三章
燕のごとく歸る……六六
佛國アーヴル港——英國サウザンプトン——倫敦——チルビュリイの波止場——テエムス河口——英吉利海峽——ビスケエ灣
第四章
故國を見るまで……八二
ビスケエ灣——大西洋——亞弗利加モロッコの沖——赤道——グリインウイッチ子午線——亞弗利加ダマラ州の沖——南亞弗利加——ケエプ・タウンの港——ダアバンの港——マダカスカル島——印度洋——スマトラの島——新嘉堡——香港——上海——日本近海
第五章
故國に歸りて……一五二
日本近海——大隅群島附近——神戸——大阪——京都——東京

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

エトランゼエ……一八七

幼きものに

はしがき……四四七
一　驢馬の話……四四九
二　旅の土産……四五〇
三　日本の言葉……四五一
四　パンと葡萄酒……四五二
五　青い海……四五四
六　鷗……四五五
七　黄色い海……四五六
八　熱帶の國……四五七
九　鹿の身上話……四五八
一〇　鰐……四五九
一一　忠實な水夫……四六二

一三　東洋の港々……四六四
一三　お釋迦さまの燈火……四六五
一四　亞剌比亞の海……四六六
一五　黑　奴……四六六
一六　エルサレムの花……四六七
一七　駱　駝……四六八
一八　以太利娘の踊……四六九
一九　佛蘭西の港……四七〇
二〇　銀杏の樹……四七〇
二一　雀の案内……四七二
二二　柿……四七五
二三　菊の花の國……四七六
二四　日本紙……四七七
二五　漆器と陶器……四七七
二六　絹……四七八
二七　鐵と材木……四七八
二八　燒肉さん、お休み……四七九
二九　働いた報い……四八〇

三〇　不思議な一言……四八二
三一　良心の眼ざめ……四八三
三二　二匹の狐の話……四八五
三三　巴里の裁判所……四八六
三四　ナポレオンの墓……四八七
三五　藥劑士の銅像……四八八
三六　天文臺の時計……四八八
三七　燒　栗……四九一
三八　山羊の乳賣……四九一
三九　兎の歌……四九二
四〇　雪は踊りつゝある……四九三
四一　小學校の生徒……四九四
四二　親鳥の愛……四九六
四三　正直な子供の話……四九七
四四　なまけものの學校……四九九
四五　佛蘭西の田舍……五〇〇
四六　少年と少女……五〇一
四七　お禮廻り……五〇四

四八 牧場……五〇六
四九 葡萄の産地……五〇七
五〇 西班牙の石榴……五〇八
五一 飛行船……五〇九
五二 一生懸命……五一〇
五三 日の丸の旗……五一〇
五四 戰爭の話……五一一
五五 兵隊さんの日……五一二
五六 鐘……五一三
五七 お藥……五一四
五八 人形の窓の下の歌……五一五
五九 お別れ……五一八
六〇 英吉利海峽……五一九
六一 日本の船……五二〇
六二 銀色の魚……五二〇
六三 赤道……五二一
六四 南十字架の星……五二一
六五 セント・ヘレナの島……五二二

六六　金剛石の産地……五三
六七　鬼……五三
六八　黒いお巡査さん……五四
六九　土人の娘……五五
七〇　鯨の取れた話……五六
七一　波の上……五七
七三　再び新嘉坡へ……五八
七三　再び香港へ……五九
七四　人形のお供……五九
七五　蜻蛉……五三
七六　門の扉……五三
七七　燕……五四
『幼きものに』の後に……五五
解題……五七

海へ

心を起さうと思はゞ先づ身を起せ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章

海へ

神戸――上海――香港――支那海――佛領セイゴン港（安南）――新嘉堡（馬來半島）――印度洋――コロンボ港（錫蘭）――アラビヤ海――佛領ヂュブティ港（亞弗利加）――紅海――スエズ――運河――ポオト・セエド

草木も活きかへる時だ。一切の芽といふ芽が競つて生長をいそぎつゝあつたことは、東京淺草のやうな狹苦しい町中にあつてさへ、それを感ずることが出來た。新しい命は瓦の屋根にこぼれた種からも、廂間の土に殘つた根からも、庭に延びた植木の素生からも一齊に萌して來た。何といふ無造作な、そして無盡藏な力だらう。去年の雪は何處にあるのだらう。去年の寒苦は何處にあるのだらう。春が來て萬物は復た新しい。ほんとに、草木の『再生』がやがてわれらの『再生』であるならば。けれども眼前にめぐつて來るやうな『再生』は、なか〳〵自分のところへやつて來さうもなかつた。

新片町にある小樓の壁からも春の焰が流れて來て居た。三年も私が凝視めたのはその壁だ。日がな一日侘しい單調な物音が部屋の障子に響いて來たり、果しもないやうな寂寞に閉される思をしたりして、もう長いこと人も訪ねず、獨りで引込みきりに對ひ合つて坐つて居たのもその壁だ。黄色い壁も慰みの一つだなぞとは奈何して言へよう。私の前にある壁は冷いとは言つても、觸れば血が滲むかと思はれるほど張詰めたものと成つてしまつた。私はあの

北海道の曠野に立つといふトラピストの修道院に自分の小樓を譬へたことがある。あの粗服粗食で激しく勞働しつつ無言の行を修めるといふ僧侶等に自分の身を譬へたこともある。私は身動きすることも、人と口をきくことも、二階から降りることさへも厭はしく思ふやうに成つた。斯の小樓に住居を定めてから最早七年ばかりに成るが、自分の周圍にあつたもので滅びるものはだん〳〵滅びて行つてしまつた。私は自分獨り復た春にめぐりあふといふ心持が深い。私はいつまでも冷然として自己の破壞に對することが出來なくなつた。ふと私は思ひもよらない人の前に自分を見つけた。

『君は。』

と私が尋ねて見た。

『僕は海から來たものです。』

『海から？』

『さういふ君を誘ひに來ました。』

この言葉に私は力を得た。私はその日まで聞いたことの無い聲をその人から聞いたやうな氣もした。左樣だ、心を起さうと思はゞ、先づ身を起せ。海から來たといふ人は一すぢの細道を私にさゝやいて聞かせて吳れた。私は長年住み慣れた小樓を、幼い子供等を殘して妻が死んだ後のがらんとした屋根の下を去らうと思ひ立つた。老船長よ、死よ、と呼びかけて地獄の果までも何か新しいものを探し求める爲に、水先案内を賴んだ人もある。死よ、その水先案内を私も一つ賴まう。

一

佛國メサジュリイ・マリチイム會社の汽船エルネスト・シモンは横濱から神戸の港に入つて來て、日暮頃までに私の乘組を待つて居た。

私は身についた一切のものを捨てることによつて、漸く船に乘るところまで動くことが出來た。あれほど引込みきりに引込んで居た私が、めつたに屋外へ出て親戚や知人の顏を見に行かうともしなかつた私が、默つて壁の前に坐つたまゝ唯もうこつ〳〵と働いて居た私が、自分の部屋の二階から樓梯を降りることさへ煩はしく思つて來たほどの私が、最後にあの新片町の家の戸を閉め、鍵を掛け、七年馴染を重ねた隣近所の人達に別れを告げて來るといふだけでも容易ではなかつた。私は住居を芝の二本榎に移し、そこに二人の子供を殘し、新橋に近い信濃屋の宿で日頃親しい人達を待受け、細い雨がしと〳〵と降る日にあの舊の停車場で親戚だの友人だの其他わざ〳〵見送りに來て呉れた人達に別離を告げて來た。ある若い人は私が氣でも狂つたのかと思つて心配した手紙を呉れ、それでは眞實か、いよ〳〵遠い旅に出掛けるのかと言つてよこして、丁度私の乘つた神戸行の汽車があの停車場のプラットフォムを離れようとする頃に、列車の窓のところへ駈けつけて來て呉れた人もあつた。『大變な見送りだネ。こんなに人の來て呉れることは自分等の一生に左樣たんとは無い。まあ外國へでも行く時かお葬式の時だ。』と言つて、Y君は私を顧みて笑つた。Y君は品川あたりまで汽車で一緒に乘つて來て別れを惜んで呉れた。あのY君の鋭い調子は妙に私の頭腦に殘つた。全く、私のは生きた屍のお葬式だ。盛んな見送りは自分にふさはしいものでは無かつた。私は悄然として遠い旅に上つて來た。

船床二百二十七番といふことまで新橋の方にあるクック會社の切符取扱所から通知してよこして呉れてあつた。用意した旅の鞄は明るいうちに船まで送り届けた。私は東京からのA君、大阪からのT君、御影からのK君、それから偶然にも神戸花隈町の旅館で一緒に成ることが出來た臺灣の兄なぞに誘はれて、ある料理屋で別れの酒を汲みかはした。その料理屋を出た頃は、すつかり日が暮れた。船まで見送つて呉れるといふ人達と一緒に、花隈町の裏側にあたる坂道を降りて、波止場の方へ歩いて行きさへすれば可かつた。

海へ。あの淺草新片町の小樓を去る時の心から言つても、私は獨りで船に乗るつもりであつた。あだかも暗夜に父母の家を遁れ出づる情人のごとく人目を恥ぢらひつゝ、あだかも火宅を遁れ出づるといふ可憐な求道者のごとく捨て得るかぎりのものを捨て去りつゝ、こつそりと故國に別れを告げて行くつもりであつた。斯うして船まで一緒に行つて呉れる諸君のあらうといふことは、いさゝか自分の豫期にそむいた。けれどもそのために何程の便宜を得たかは知れない。旅慣れたA君は私のために旅費の一部を英吉利の金や佛蘭西の紙幣に換へて來るほどの面倒を見て呉れた。英貨のシルリングは東洋の港々に上陸した時のため。佛貨のフランは私のやうに佛國船を擇んで乗つて行くもののため。私は全く經驗のない、全く言葉の通じない船旅に上らうとして居た。

旅慣れて心易げなA君は私に向つて、

『言葉が通じないといふことも、旅の面白味の一つぢやありませんか。』

と言つて呉れた。この餞別の言葉は私に取つて難有かつた。

海は暗かつた。岸にある船客の待合所には、花隈町の旅館のおかみさんが女中と一緒に私を待受けて居て呉れた。紅白の糸をわざ〳〵夫婦して糸卷に卷いて、針を添へて、それを餞別に呉れるほど届いた斯のおかみさんは、見送りかた〴〵佛蘭西船を見たいと言ふ。棧橋に近い波の際には、大阪商船會社のO君、S君なぞの厚意で、一艘のランチも私を待受けて居て呉れた。やがて私は諸君と共にランチに移つた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com